

小さな群れ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-19 キーワード (Ja): キーワード (En): Tohoku Gakuin University 作成者: 北, 博 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24776

「小さな群れ」

総合人文学科長 北 博

申命記七章六―八節

6 あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の面おもとにいるすべての民の中からあなたを選び、御自分の宝の民とされた。7 主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。8 ただ、あなたに對する主の愛のゆえに、あなたたちの先祖に誓われた誓いを守られたゆえに、主は力ある御手をもってあなたたちを導き出し、エジプトの王、ファラオが支配する奴隷の家から救い出されたのである。

ルカによる福音書一二章三二節

32 小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。

申命記は、ヨルダン川東岸のモアブ地方でモーセが神から告げられたことをイスラエルの民に語る、という形式になっています。今日お読みしました七章六節以下も同様です。ここでイスラエルの民は、「主の聖なる民」また「宝の民」と呼ばれています。それは神である主があなたを「選び」、ご自分のものとされたからだ、としています。続く七節でも主が「選んだ」ことが繰り返し強調されます。そして、それはあなたたちが他のどの民よりも大きかったからではない、それどころかあなたたちは、他のどの民よりも貧弱だったのだ、と続きます。そして八節で、エジプトの奴隷状態から主がイスラエルの民を救い出した出来事が想起されます。

この申命記の個所と似た言葉が出て来るのは、出エジプト記一九章三―六節です。こちらは、モーセがシナイ山に登って行くと神が彼に語りかけた、という場面です。神はモーセに、民に向かつてこう告げよ、あなたたちは私の「宝」となり、私にとって「祭司の王国」「聖なる国民」となり、と言います。

祭司は、神に近づき得る人間です。それまでエジプトの底辺で隷属状態に置かれ、神から遠い存在と見なされていたイスラエルの民が、「祭司の王国」と宣言されることによって、等しく神と結びついた存在となった、ということ。また、「聖」とは分離を暗示する言葉です。それまで

受動的に属していた集団から取り分けられ、それまで不本意ながら受容していた奴隷としての生き方を意識的に断ち切り、主の「聖なる国民」として新たな主体的関係性の構築を目指す共同体となった、ということです。ここでは申命記七章で強調されていた「選び」という言葉はありませんが、やはり主の「選び」が暗示されている、と考えるべきでしょう。

続く出エジプト記二〇章では、神である主が、自分は「あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神」であると自己紹介した上で、わたし以外の何者をも神としてはならない、また如何なる像にも仕えてはいけない、と語りかけます。ここでは、エジプトの隷属状態の中でファラオを神としてそれに仕え、その像に向かってひれ伏すことを余儀なくされていたことが暗示されます。そして五節において、神である主は、「わたしは熱情の神である」と宣言します。「熱情」とは神の人間への限らない優しさ、熱愛であり、啓示の源泉、神の人間への神秘的な関わりを表現です。神の熱情に触れた時、人間は本当の意味において神の似姿となり、意志的かつ主体的な新しい生き方に目覚めるのです。

私は若い頃何度か、岩手県の奥中山高原にある「カナンの園」の「小さき群れの里」という施設に、教会の人達と一緒にいたり、ある時は一人で訪ねたりもしました。その施設では、障がいを持った青年達が職員の皆さんの助けや付近の方々の応援を受けながら、共同生活を営んでいたのです。

私が感動したのは、青年達がそれぞれ弱さを抱えながら、それを隠そうとするのではなく、お互いにその弱さをさらけ出し、認め合いながら、励まし合って生きてるように見えたことです。健常者とは弱さを隠し通せる人間のことではないか、とその時私は思いました。でもそうやって見栄を張り、強がって競争し合う生き方が本当に人間らしいと言える生き方なのだろうか、それは単に「お金」「地位」「名誉」といった価値観の奴隷となって、ひたすらそれらに仕えているだけではないだろうか、そう私は思いました。それほど、その施設の青年達はありのままの自然体で生きているように見えたのです。

「小さき群れの里」のホールには、次の聖書の言葉が書かれた垂れ幕が飾られていました。「恐れるな、小さな群れよ。御国を下さることは、あなた方の父のみこころなのである。」

前の口語訳なので、新共同訳とは少し違いますが、ルカによる福音書二二章三二節からの引用です。初めて行った時にこれを見て感動した私は、次に行く前にこれにメロディーをつけて歌にしてみました。

主の選びとは、このようなことを言うのではないのでしょうか。神の選びの民、選ばれし人とは、このような人々のことを言うのではないのでしょうか。そこに主がきつと居て下さると確信できる場、正に今ここに主がいて、私の傍らに立っていて下さることを実感出来る場、これこそが本当

のシャローム、主の平和なのではないでしょうか。

主の恵みは最も弱いところに働かれます。自分の弱さを認め、それを主に託そうとする者達を、主は決してお見捨てにはなりません。私達は、弱さを携えて主にすがるとき、既に主選ばれているのです。このことを忘れ、私達の強さ、才能や能力、強い性格、そして強い信仰を誇る時、主は既に私達の許を去ってしまっているのではないのでしょうか。そのような誤解をしないよう、驕らず高ぶらず、常に自然体で、弱さの原点に立ち返って生きたいものだと思っています。